
ティアドロップ

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティアドロップ

【Zコード】

N7173R

【作者名】

a y u

【あらすじ】

いつも見る夢と、飴玉のお話。

最近、夢を見る。
いつもいつも同じ夢ばかり。

何かを掴もうとしてか、何かを奪おうとしてか、俺は思いきり手を伸ばし飛び跳ねる。けれど、どんなに手を伸ばしても高く飛んでもそれには届かない。

それでも、止められない。

欲しくて欲しくて仕方が無いのに、絶対に届かない。

……けれど、“それ”とは何なのだろう。

何にも変え難いくらい欲しくて堪らないのに、“それ”が何のかはさっぱり覚えてない。どうしても、思い出すことが出来ないのだ。

「……………ん？」

日曜の昼、一人暮らしの俺はレトルトのカレーライスを食べながらテレビを見ていた。そのときふと、あるコマーシャルが目に入った。

「……………胡散臭い」

おいこれ馬鹿じゃねえのこんなもん何処の誰が信じるんだよ嘘臭いなしかもなんだよ飴玉のコマーシャルかよおいおい誰が買うんだよコマ、という感じのコマーシャル。

しかも胡散臭くて、嘘臭くて、きっと正気の人間だつたら絶対に手は出さないだろうなという宣伝文句。けれどどうにとも、その誘いは今の僕にはとても魅力的なように思えて、どうしてか、見入ってしまった。

『“ティアドロップ”

あなたの記憶を呼び覚します。
口に含み、全てが消えて無くなつた時、あなたの最も望む記憶が自然と蘇ります』

一体どこの三流小説だろつか。

飴玉一つ口に入れただけで記憶が戻るのなら何の苦労もねえんだよと俺は口には出さずに心中で毒づく。

……それでも、と思う。

いい加減あの夢を見るのも嫌になつてきた。
たかが飴玉一つだ。そんなに高いもんじゃないし、一度試してみるのもいいかもしねれない。

ダメでもともと。

期待なんかしちゃいない。

だけど、本当に戻つたら儲けもの。

言い訳に言い訳を重ねて、怪しいかもしねないといつ思いを胸に押し込んだ。そして後日、僕はその飴玉を手に取つていた。

に放りこんだ。

- - 飴なんか久しぶりに食つたなあ。
思いながら、ミント味のそれを口の中で転がす。
結構な大きさだからガリと噛んでしまいたいのだが、包みに『決して噛まないでください』とあつからぐつと堪える。何でも、飴が砕けると記憶まで一緒に碎けてしまうとか何とか。

「…ふうん」

綺麗な水色の、ビー玉みたいな飴玉。

透明なビニールの包みは丸めて「ミニ箱に捨て、早速飴玉を口の中に放りこんだ。

- - 飴なんか久しぶりに食つたなあ。

思いながら、ミント味のそれを口の中で転がす。

結構な大きさだからガリと噛んでしまいたいのだが、包みに『決して噛まないでください』とあつからぐつと堪える。何でも、飴が砕けると記憶まで一緒に碎けてしまうとか何とか。

馬鹿馬鹿しいことは思つけれど、仕方が無い。

手段を間違えてしまつては田的は達成できないのだ。

「……」

よし、全部無くなつた。これで記憶も戻るはず…が、戻らない。
「とにかくじょひと舌打ちをして時計を見ると、もう夜の11時だ。
テレビを見ていたとは言え、たかが飴玉一つのために夜更かしをするつもりなど毛頭無い。

わざかな苟立ちを抑えつつも、俺はもう寝ることにした。

返して…返してよつ…！

これは…。ああ、そうか。小学生時の俺だ。

なんだよ、ただの模様のついた石じゃないか。ちょっとへり
いいだろー？

違う、ただの石じゃない。アンモナイトの化石だ。誕生日で貰つたそれをクラスメイトに取られ…。そうだ、それで川に落とされたんだ。

そうだ…思い出してきた。

返して、返してと散々飛び跳ねたけれど、結局化石は返して貰えなくて、さらに川に落とされた。半日川の中を捜したけれど見つからなくて…。

だんだんと、鮮明に…記憶が蘇つてくれる。

「 つ！！」

ガバッと体を起こし、辺りを見まわす。

そこは、自分の部屋。眠りに就く前と何も変わらない、一人暮らしの小さな部屋の中。

「 ……嫌な記憶だ」

俺は溜め息を吐いた。

そして、あることに気付いて眉根を寄せる。

『ティアドロップ（一滴の涙）』とか。

はあ、と俺はもう一つ溜め息を吐く。
思い出は思い出のまま、忘れた記憶は忘れたままにしておくのが精神的に良いのかもしれない。

「 ……くそっ」

そうだ、そのほうが良い。

つ、と頬を伝った一滴の涙拭い、俺はもう一度布団にもぐった。

……案の定、疲れなかつたけれど。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7173r/>

ティアドロップ

2011年5月31日12時08分発行